

今年の夏休み、皆さんは学校の宿題でいろいろな教会に行かれたと思います。で、教会には普通「牧師先生」あるいは、カトリック教会ですと「神父様」と呼ばれる人がいる訳でありますけれども、ある教会にとっても偉い、立派な牧師先生がおられたという事があります。その牧師先生は、外国にも留学し、博士号も持ち、いろいろな本も書いておられた、立派な牧師先生であります。その牧師先生が亡くなりました。そして天国への階段を上って行った訳ですけれども、天国の門の所に来たとき、なぜか天国の門が閉じられていた、というのでありますね。で、その牧師先生は、門が閉じられていたものですから、大きな声を出して「おーい、ワシだ。(フヨフヨ)牧師だ。開けてくれー」と、ドアをノックしながら言ったというのであります。でも、何の返事もありません。「おかしいなー」と思いながらも、その牧師先生はドンドンと戸をたたきながら「ワシだー。門を開けてくれー」と叫び続けたというのであります。そうしますと、だんだんと門の内側が騒がしくなりました。そして、門の内側から、その牧師先生が牧会しておりました教会の人（先に天国に召された人）の声がして、こう言ったというのであります。「(フヨフヨ)先生ですか、なぜ外にいるのですか。はやく中に入ったらどうですか」。そうしますと、その牧師先生は「門が開かないんだ。中から開けてくれ」と言ったというのであります。そうしますと、その人は「中側からはドアが開きません。開かないようになっているのです」と答えたというのであります。その言葉を聞いてその牧師先生はビックリして「どうしよう、どうしよう」とあわてふためいたという事があります。

このお話は、本当かどうか分かりません。たぶん作り話ではないかと思えますけれども、しかし、先程お読みいただきました聖書の言葉を読みますとき、このお話は、どうも人ごとのようには思えません。先程お読みいただきました聖書には、このような事が記されておりました。「あなた方のうち多くの者は、教師にならないがよい。わたしたち教師が、他の人たちよりも、もったときびしいさばきを受けることが、よくわかっているからである」。どんなに立派な牧師先生でも、必ずしも「天国」に入れてもらえるとは限らない。なんか考えさせられるお話であります。

ところで、今日は、こういうお話をするつもりでここに来たのではありません。今日は「舌のお話」をしたいと思っております。「舌」と申しましても、上、下の「下」ではありません。「tongue」口の中にあります「舌」、まあ、「べろ」と言ってもよいかも知れません。舌、べろ、これはとても大切なものであります。舌がありませんと味が分からない。否、それだけではなくて、言葉が正しく話せません。声は出ても正しい発音が出来ないのであります。皆様は英語の授業でよく経験しておられると思いますけれども、Rの発音とLの発音、これは舌の位置によって発音が違います。私たち日本人には同じように聞こえましても、英語を話す人には、微妙な違いとして聞こえる訳であります。ですから、舌がないと正しい発音も出来ないという事にもなる訳であります。でも、問題は発音の問題ではありません。今日は舌から出てくる言葉、口から出てくる言葉について少しお話したいと思えます。

昔から、日本では「口は災いのもと」というような事が言われてまいりました。まあ、正確には「口は禍の門」と言うらしいのですけれども、うっかり吐いた言葉から禍を招くということは往々にしてある訳であります。私なんかもしょっちゅう、この言葉で失敗しております。言わなくてもいい事まで言って気まずい思いをするというような事がよくある訳であります。私の子供は親に似て背は低いのですけれども、顔は母親に似て結構大きいものですから、ついつい「顔はお母さんにそっくりだね」なんて言ってしまう訳であります。そうしますと、それを聞いている家内は機嫌を悪くして、食事も作ってくれない。まあ、普段はそんなことはないのですけれども、たまたま夫婦喧嘩なんかしておりますと、とんでもないしっぺ返しを受ける訳であります。ですから、「口は禍のもと」。注意して語らないと、とんでもないことになるのであります。みなさんはそんな経験をした事はないでしょうか。

ところで、聖書には、この口の問題、言葉の問題について非常におもしろいお話が載っております。先程お読みいただきましたヤコブの手紙の3章の3節、4節のお話がそれです。先ず3節にはこのようにあります。「馬を御するために、その口にくつわをはめるなら、その全身を引きまわすことができる」。馬、まあ、馬にもいろいろな馬がいるんでしょうけれども、サラブレッドもいれば、じゃじゃ馬もいる。まあ、いろいろな馬がいる訳ですけれども、馬はそれだけでは私たちの言うことを聞いてくれません。ですから、普通は「くつわ」というものをつける訳であります。「くつわ」、ご存知の方も多いと思いますけれども、馬の口に含ませる金属製の道具のことです。それを馬の口に含ませて、そしてそれに手綱をつけて馬をコントロールする。馬を御するためには、どうしてもその口にくつわをはめなければならないのであります。そうすれば馬を自由にコントロールすることが出来る。まあ、これは当たり前な事なんでありましてけれども、これが私たちの口の問題、言葉の問題のたとえとして語られているというのは、これは非常に面白いと思うのであります。

それから、もう一つ、4節の所には、このようなお話が載っております。

「また船を見るがよい。船体が非常に大きく、また激しい風に吹きまわられても、ごく小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される」。どうでしょうか、これも面白いたとえではないでしょうか。どんなに大きな船であっても、かじ一つでどうにでもなるというのであります。激しい風が吹いて、波にもまれている船であっても、小さなかじ一つで船は操縦者の思いのままに操ることが出来るというのであります。これは、私たちの口もじょうずに使えば、自由自在に相手を操ることが出来る。そんなふうにも受けとめられるたとえでありますけれども、ここで言われている事はそういう事ではありません。ここで語られておりますのは、小さな口、小さな言葉でも大きなことが出来る。大きな影響を人に与えるというのであります。

私たちの語る言葉、それは自分にとっては些細な、どうでもいいような言葉かも知れませんが、それを聞く者にとっては、それによって大きな影響を受ける場合もあるのであります。自分はそんなつもりで言ったのではないと、いくらあとから弁明いたしましても、その言葉によって一旦傷ついた人の心はなかなかいやされません。最悪の場合は、今までうまく行っていた関係が険悪になるという事だって起こり得る訳であります。ですから、私たちは自分の語る言葉については、責任を持たなければなりませんし、また、細心の注意を払わなければならない訳であります。

先程お読みいただきました聖書の中には、このような言葉もあります。

「舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか」。口から出る言葉、それは確かにすばらしい事を語ることもあります。でも、とんでもない事を語る場合だってあるのであります。「舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する」。「ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やす」。私たちの語る言葉というのは、口から出てくる時は、たとえ小さなものでありましても、それが人に大きな影響を与える事もあるのであります。ですから、言葉というものは大切なのであります。たとえ小さな言葉であっても大きな力がある。大きな影響を人に与えることもある。私たちはこの事を先ずしっかりと覚えておきたいものであります。

さて、言葉の大切さという事は、このくらいにしておきまして、最後に、それでは、このような私たちの語る言葉、それをコントロールするにはどうしたらいいのかという事について、少しばかり考えてみたいと思います。

聖書には「もし、言葉の上であやまちのない人があれば、そういう人は、全身をも制御することのできる完全な人である」とあります。先程お読みいただきました3章の2節の言葉であります。言葉で過ちを犯さない人、そういう人は自分の全身を制御できる完全な人。確かにそうだと思います。でも、そう出来ないからこそ問題がある訳であります。私たちは完全な人間ではありません。ですから、どうしても言葉で過ちを犯してしまう。人の悪口をいったり、ウソをついたり、また、ついつい人を傷つけるような事を言ってしまうたりもする訳であります。最近「言葉の暴力」なんてことも言われますけれども、言葉には「人を傷つける」とんでもない力があるのであります。そのような言葉、それをコントロールするにはどうしたらいいのか。先程、馬の例がありまして、「馬を御するためには、くつわをはめればよい」とありました。私たちも口にくつわをはめて、言いたいことも言わないようにする、そうすれば少しは言葉の過ちを少なくする事も出来るかも知れません。でも、そんなことをすれば、今度は「言論の自由が侵される」というような事にもなりかねません。それでは私たちはどうしたらよいのでしょうか。私たちの言葉をコントロールするには、一体どうしたらよいのか。みなさん何かいい考えがありますでしょうか。

私は、言葉をコントロールする、一番よい方法は「亀」になる事だと思います。聖書には「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」という言葉があります。ヤコブの手紙の1章19節にある言葉であります。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」。聞くときはよく聞いて、しっかりと理解する。しかし、語る時は「亀になる」、ゆっくりとじっくり考えてから、語り出す。怒る時も「亀」、ゆっくりと考えてから怒る。まあ、怒るときは、大体がカツとなって怒る訳ですから、「亀」になると言いましても、なかなか難しいかも知れませんが、語るときは、じっくり考えてから語る、そういう事は出来ると思うのであります。

最近は何んでも早ければよいという風潮がありますけれども、亀も満更捨てたものではありません。この世の回転が速くなればなるほど、私たちはむしろ亀の「のろさ」というものにもっと注目してもいいのではないのでしょうか。特に、語る事に関しては、聖書が教えるように、「亀」になることが大切ではないかと思えます。ゆっくりと考えてから、適切な言葉を語る、それが私たちの言葉をコントロールする秘訣のようにも思えます。みなさんはどのように思われますでしょうか。 - 祈ります -